

---

## **有効期間1時間**

朔架

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

有効期間1時間

### 【Zマーク】

「Z8785」

### 【作者名】

朔架

### 【あらすじ】

一本の電話から始まる話。

SFなのかファンタジーなのか？

ま、どちらでもない気がしますが。

ためしに読んでいただけると幸いです。

それはある日の午後、一本の電話から始まった。

「おめでとうござりますーー！」

電話越しなのにも関わらず、耳がキーンとする。

『何のことですか？』

懸賞に応募なんてしてないし、宝くじにかける金があるなら食い物を買ひ。

だから俺には何のことかさっぱり分からなかつた。

「貴方当選したんですよーーといつても応募したのは未来の貴方ですけどね。」

余計に意味が分からなかつた。

未来の自分? 何を血迷つたことを言つてるんだ。コイツは。

今日は仕事が休みで自堕落に過ごしあるひじてたんだ。

そういうや自己紹介がまだだつたか。

俺は梅村彼方（うめむらかれなた）どこにでもいる平々凡々な18歳の男だ。

職業は会社員。血液型は…つてどうでもいいか。

『ほんとに何のことだが分からないんだけど。』

『だから、未来の貴方に今から1時間だけ会えるんですーー！』

今聞いたよ、ソレ。会える? 未来の自分と?

会つてどうしろっていうんだ。

『というわけで、いつてらしゃいます』

ガチャン

と一方的に電話は切れた。

新手の詐欺か? まあいいか、どうでも。

受話器を置いてベッドに横たわった。

一步踏み出す。

### —その時だった—

世界が反転する。ぐにゃりと視界が歪む。色がくなつていいく。

俺が次に見たのは、

見覚えのある家だった。それはそうだ。

だつて俺3月までここに暮らしてたんだし。

そう俺が今いるのは実家だった。

でもおかしいんだ。

俺は確かに家を出て、一人暮らしをしていた。

それに間違いはない。

「来たか。」

声がした。

「よう！過去の自分。ん？高卒ぐらいの頃か？」

なぜ分かる！てかお前は何歳なんだ！

内心ツシミをいれる自分に呆れた。とりあえず現状把握をしようか。

『ここはどこで、貴方は誰？元居た場所に帰る方法は？』

「そう怒んなつて。ここは空想世界みたいなもんだ。俺は、お前だ。12年後のな。帰るにはとりあえず1時間待て。」

きつちり質問に返答した未来の自分。

ん？待てよ、12年後？ってことは30歳か…。

目の前にいるやつぱりどこにでもいそうな、おっさんだった。

「どうだ？落ち着いたか？？ま、突然こんなところに呼んじやつて

悪かったな。」

「「問題ないだろ。どうせ休みなんだし。」「

ん?今、もう一人分声が聞こえたような…。」

「「気のせいじやないぞー。現実逃避するなよ。」「

『人の心読むなよ!』てか、お前は誰だよ?』

「「俺は5年後だ。」「

△俺は15年後だ。』

声がまた増えた。

『ちょっと待つて。一体何人居るんだ!!』

「ん?12年後の俺だろ、あとは3年後、5年後、8年後、15年

後、20年後だから、6人のおれがいるな(笑)』

いや、(笑)じゃないから!!

『で?今の俺に何のようなんだよ。』

『後悔するなってことを言いにだな。』

「「ま、言つても無駄だけどな。」

△また、お前は!!』

だから何がしたいんだ、お前らは。

「单刀直入いいうぞ。」

『早く言えよ。』

△まあそう焦るな。』

『近いうちに千佳から別れ話がある。別れたくなかつた戻つてからメールしどけ。』

『なんで、分かるんだよ!!そんなこと。』

「「なんでつて、実際そうだつたから?」

「お前は社会人、千佳は大学生。時間が合わない、しかも俺からは連絡なんて滅多にしない。」

『ソレが何だつていうんだよ!!』

△理由になるんだよ。大学は誘惑が随分多いらしい。』

「「それが嫌ならマメに連絡とれよーーー。」

「何なんだ。ソレ。千佳と俺が別れる?  
んなわけ…。ないつて言い切れないか。

『今頑張れば、未来つてのは変わるのか??  
思わず聞いた。

「さあな。俺らは後悔した未来のお前だから、分からぬ。』

『んだよ、ソレ。』

でも、前向きにいけばなんとかなるかな。

「お、1時間たつたな。これでお別れだ。後悔しない選択をしよう。」

『おひ。じやあ。』

「「くじけるなよー。」

「また、お前はわざわざこうことを言ひて…。」

また視界が歪んでゆく。

この世界の色がなくなつて、俺が居るべき場所の世界に色がついて  
いく。

自分が集まるつて変な気分だった。

でもきっと俺はこういう人間になつていくんだりつと素直に思つた。

明日からまた頑張ろう。

……。

ジリリリリン!!

『ん?朝か?』

つて今のは夢か?

妙にリアルな夢だったなあ。

目覚ましを止める。

ん?遠くから電話の受信音がするような。



(後書き)

ども。朔架さくかです。

久しぶりに小説を書きました。

学生の頃は、お題ばかり考えていたせいか、

今回、中々書きあがらなかつたです。

それでも少しでも面白いと感じていただければ幸いです。

さて、作中にある最後の電話は誰からか？

この1点に関しては、

皆様の想像にお任せいたします。

実際私の中にも3通り存在するので。

感想で教えていただけると舞い上がります（笑）

では、また別の作品でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8785/>

---

有効期間1時間

2010年10月15日23時02分発行